



③ 検証の工夫

私たちは、アンケート調査と見取りを検証の材料としてきた。本校のアンケート調査の結果からは、「道徳の時間の時間が好きである」、「ためになる」と回答する生徒の割合は学年が上がるごとに増えている（16ページ参照）。

また、本年度のアンケート調査からは学年が上がるにつれ、道徳性の高揚が見られ、意識面と行動面の差も縮まっている（上グラフ参照）。この結果から考えれば、本校の研究はある程度の成果が現れたと考えることができる。

しかし、その一方で心の問題を数値化することの限界もある。アンケート調査を見ても、一つの内容項目に対して、発達段階に応じた道徳的実践の場面設定をすることや、複数の回答項目を設けるなど、今後更なる工夫が必要である。生徒の変容をとらえる上でも、経年比較する上でも、より信頼性と妥当性の高い検証方法を目指して行きたい。

④ 学校・家庭・地域の連携

本研究では、道徳教育について保護者や地域の人々の理解を求めるとともに、学校で指導した内容が家庭や地域の生活の中で反映されるように、学校だよりやホームページを活用するなどしてきた。

その一方で、家庭や地域での取組や願いが学校の生活の中で生かされなければならない。私たちの身近には人生観や価値観を学ぶお手本となる人がたくさんいる。例えば、お米の一粒を大切にすること。在所仕事で協力して草を刈り、地域をきれいにする大人。地域みんなで支えるお祭り。古くから守り伝えてきた文化がこの校区には残っている。そんな地域の良さ、人の素晴らしさに気づき、今自分たちができることを進んで実践できる生徒を育てていくことが大切である。学校、家庭、地域の大人が、心豊かな生徒をどのように育てていくかを語り合う共通の学びの場をつくり、人間としてのよりよい生き方を考えていくことが双方向性のある連携には必要であろう。

おわりに

近年の社会の変化は都市部と地方の区別なく、若者や子どもたちの心にも大きな影響を与えてきました。このことから新学習指導要領では「道徳の時間」を要とし道徳教育を学校教育全体において取り組むものと位置づけました。すなわち道徳教育についての学校への期待はより一層大きなものとなりました。

平成20年度にこの研究の委嘱を受け、私たちは初めて真剣に「道徳の時間」というものに向き合い始めました。旧態依然の授業をしていた私たちにとって、すべてが手探りの状態でのスタートでした。「規範意識とは何か」「各学年の重点事項とは何か」「どんな発問をすれば有効か」など分からないことが沢山ありました。そのような中で昨年度よりこれまで、すべての「道徳の時間」を職員間で公開授業とし、授業整理会を開いてお互いの意見の交換を積み重ねてきたことが、私たちにとって何よりも大きな財産となりました。

今年度、本校では職員の半数以上の異動がありました。しかしながら短い時間であったものの、新旧共に悩み、話し合い、実践を積み重ねながら全員一丸となって今日まで精進を重ねてまいりました。2年間の実践によって教師の授業力は格段に改善され、生徒にも望ましい変容が見られるようになりました。生徒の変容は単に「道徳の時間」の学習姿勢にとどまらず、徐々に学校生活や家庭での過ごし方にも現れているようです。まさに道徳教育の目指すところに一歩でも近づけたと、私たちは喜んでいるところです。

しかしながら、今回の実践研究では多くの課題も浮き彫りにされました。「道徳の時間」で得られた心の変容やそれが行動として定着するためには、生徒に繰り返し同様な体験をさせなければならないことや、学校のすべての教育活動と連動させ道徳的実践の機会を設定しなければならないこと、また家庭や地域との連携をまだまだ充実させていかななければならないことなど、限られた時間の中では解決できないものばかりでした。それらは課題というよりは、道徳教育の本質であるように思えます。

今の中学生が生きる未来。その未来に生きる大人として、私たちはどんな人間になって欲しいのか。どんな社会を築いて欲しいのか。私たちは、今後も「道徳の時間」を要としながら、常に学び研究を深めていきたいと考えています。

最後になりましたが、これまでの研究の中で終始、温かくご指導を賜りました淑徳大学名誉教授の新宮弘識先生、金沢工業大学教授の伊藤啓一先生、石川県教育委員会並びに奥能登教育事務所の各指導主事の先生方、そのほかご支援頂きました能登町教育委員会、地域の方々には厚くお礼申し上げます。

平成21年10月15日

教頭 井上 和正

研究同人

新傳 博文	井上 和正	柿平 哲夫	中社 進
道浦 浩幸	山下 昇	東出 真弓	久田 一哉
道端 啓子	松波美千代		

平成20年度 研究同人

山本 松二	蟹 豊文	山田 雅子	殿田 育代
戸成 知美	波並 智美	高野すみ子	